

も夜明けまでと、徹夜で、一萬噸にあまる船腹を、手品のやうに、不良品とごまかして、征服してしまふのだつた。

ばうッ！ ばうッ！

出帆の朝。——あの色けのない本船の喉ふとい汽笛の聲が、横濱の朝靄をゆるがすころになると、あつちこつちの遊仙窟から、それこそ、取るものも取りあへず、といったやうな、あわてふためいたヤンキイたちが、上は船長から下は火夫やヨツクにいたるまで二人曳きで押ッとばして、出帆五分前——二分間まへといふ、際どい所を棧橋の本船へ駆けつけてくる。

その時こそ、船乗りヤンキイの蕪情さかげんがわかるし、開港場の女たちの、いと、あつさりしたものであることが歴然とする。

「この次は、サイベリア丸だとさ」

呉の客を送つて、すぐに越の船の入港日を税關の前の掲示板で見ながら、よく戦つた白粉の女たちは、裾寒げに、ぞろ／＼と、自分たちの巢へ歸つてゆくのだつた。

「や、ご苦勞、ご苦勞」

高瀬理平は、やつと一船かたづけて、ほつとしたやうに、腰をたゝいた。——その朝は、千歳の女將が姿を見せなかつたので、船の外人を送つてきた藝者たちも、何となく、つく穂がなく、まじめに挨拶をして、それ／＼の方角へ、俵の幌をかぶつて、歸つて行つた。

「旦那さま、旦那さま」

棧橋を出ると、すぐに、迎への馬車が理平の方へ寄つて來た。

「お疲れでございませう」

と、お嬢は、一昨日の晩から、別人のやうに彼に親切だつた。こんな朝はやくに、彼を迎へに來ることだつて珍らしいのであつた。

「——朝は、だいぶ寒くなつたな。もう季節だとみえて、鯊釣の竿が見えだした」

「夜ふかしがつゞいたせみでございませう」

「それもある。……あ。奈都子はどうしたね、醫者に見せたかい」

「あれから、ずつと、寢てをりますの。石川博士が毎日診察に來てくださいます」

「病名は」

「やはり神経性のものだらうと仰言やるんですが」

「分らんのか。……熱は」

「三十八度前後……。ゆうべは、九度ちかくまでありましたが」

「ふーむ」

「やつぱり、年ごろですから」

「肺ぢやあるまいの」

「理平は、沈鬱になつた。眼の下の皮が、疲勞にたるんでゐた。北仲通りの本宅へ、馬車はやがて着いた。支配人はまだ事務所の電燈を鼻の先まで下げて執務してゐた。瀬戸の大火鉢にゆうべからの忙しさを語る吸殻がむせッぽい煙を漲らしてゐた。」

「松下君、やすみたまへ」

「あ、お歸りで」

「だめ、だめ。此ッ方もヘトヘトに疲れとるから。話は、あとで聞かう」

あわてゝ、手を振つて、理平は奥の洋室へ逃げこむやうにはひつた。どつかりと、椅子のなかに體を投げこんで、

「珈琲」

兩手を、後頭部でむすびながら、胸をそらして、

「熱く！」

と、いひ足した。

それを待つてゐる間に、彼は眉をしかめ出した。上の露臺だらう、朝からハーモニカを持ち出して、幼稚な、騒々しい音を、吹きちらしてゐる者があつた。

### 聞入者

おそろしく熱いコーヒへ、くちびるを近づけたゞけで、理平は、ふきげんに下へおいて、

「誰だ、あれは」

と、女中へ咎めた。

「ハーモニカですか。あれは、をとゝひの晩、千歳のお女將さんと警察署のお方が預けておいでになつた、トムさんです」

「トム公か。困つたやつぢやの」

「ほんとに、とんでもない者を預かつてしまいましたわね。警察へおいてくれ、ばいゝのに」

「だが、お女將の證言がほんとだとすると、あれが、千坂男爵の身よりのものだといふのだから、さう分つてみると、署長も虚置に困つとるんだらう……。おいあの小僧に、トム公に、さういへ、病人があるんぢやから、そんなものは吹いては困るつて」

女中は旨をうけて、さつそく露臺へ上つて行つたらしいけれど、ハーモニカはやまなかつた。

理平は一睡したのであつたが、それが氣になつて寝る氣にもなれなかつた。千歳へ電話をかけさせてみると、お女將はきのふ東京へ行つてまだ歸つて來ないとのこと、結局、そこへも當りやうがなく、隣室へ寢床を命じて、横になつた。

讀みかけてゐた新聞にも、すぐに眼がつかれて、二三時間ほど彼はウト／＼としてゐた。——すると

隣室で、聞き馴れない來訪者の聲がひびいた。

「ごじやうだんでせう、君！ 嘘をいッたつて、だめよ」

それは、男とも聞えるし、女ともうけとれるアクセントだった。

「——居留守なんて、古手だわよ、第一、君、自身ですら、女中に居ないといはせておきながらこゝに居るぢやないの。然し、君だけちや相手にならないですから、御主人に會はせてください」

「だつてほんとに今、主人は船のお客をつれて、箱根の方へ參つて、不在なのです」

「應接してゐるのは、明らかにお摺だった。けれど、來訪者の壓倒的な語調のまへに、何となくおろろしてゐる風がわかる。

「誰だらう？」

と、理平は寢床の上に取り上つて、耳を澄ましてみた。

「ホ、」と、落着きすました笑ひ聲だ。笑ひ聲はやはり女だった。「——今朝、淺橋からお歸りになつてから、こゝの御主人はまだ一步も外へ出てゐないはずよ。君！ そんな嘘ッばち、いくら並べても、認めなくつてよ。はやく、會はせたまへ」

「あなた。會はせる會はせないはとにかく、いつたい誰に斷つて、こゝへ、はひつて來たんですか」

「女中君が、嘘をつくから、家宅侵入を敢てしたのよ、君、訴へますか」

「……呆れましたね、なんていふ、あばずれでせう」

「けれど、君ほどは、あばずれでないつもりよ。その證明は後に立てます。とにかく、御主人を呼んでもらひませう」

「みませんよ」

「みます」

「みません」

兩女がいひ募つてゐるところへ、扉を押して、ひらりと、はひつて來た者があつた。ポケットの口にハトモニカを短銃のやうにのぞかせてゐるトム公だった。

「お光さん」

「あ、トム公、おまへこゝにゐたの？」

「主人はすぐその奥に寝てゐるぜ、ゐないなんて、大嘘さ、おれが連れて來てやらう」

と、大股にあるいて、隣室の扉をぼんと足で開けた。すかさずに、支那服のお光さんは、彼についでその部屋の中から、

「御主人、起きて頂戴な」

と、覗いた。

## 征 服

「誰だおまへは。やたらに人の居宅へはひつて、寢室へまで無断で来るやつがあるか。警察へいふぞ」  
「結構ですわ」

と、お光さんは、椅子に倚つて、ほそい脚線を組みあはせた。

「けれど御主人、君は、私の用向きを聞かなくつてもいゝんですか」

「おまへみたいな婦人に、わしは、何の用件も持つとらん。いづれおまへは、女愚連隊とか、ハンケチ女とかいふ、そんな類の者ぢやらう」

「さうよ、私は、ハンケチ女から成り上つた、女の愚連隊よ。しかし御主人、君もつい十何年かまへは、港橋で眞ッ黒なバイスケを擔いでゐた石炭擔ぎぢやなかつたの」

「失敬なことをいふな。つまみ出すぞ」

「おもしろい、私が、つまみ出されるかどうか、トム公、そこで見物しておいで」

「あ。見てみよう」

トム公は、二つの椅子を並べて、その上へ足を投げ出しながら、ハーモニカを弄んでゐた。

「——が、御主人、つまみ出されるといけないから、その前に、かんたんに私の訪問した好意だけを分つてください」

お光さんはポケットを探つて、まだ感光液のねばりさうな生々しい一葉の寫眞を出して、理平のまへに突き出した。理平は、手もふれようとしなかつたが、ちらと見ると、顔いろをうごかして、思はず眼

を奪られてしまつた。

「どうですか、この寫眞は。……夫人、あなたもこゝへ来て見ないこと。たいへんよく撮れましたよ」

お光は青白い戰慄を奥齒にかんでゐた。寫眞の畫面には、大きな自分の顔と、騎手の神崎の顔が、唇を寄せ合つて、見るからに淫らな陶醉を語つてゐた。彼女は、この間の晩、その秘密な場面を盗まれたせつなに浴びたマグネシウム閃光を、今また、驚愕の後頭部によみがへらせて、眼がぐらぐらとして來た。

「御主人、君は、買ひますか、買ひませんか、この寫眞を」

お光さんの笑靨は、だん／＼に冷たく誇らしくなつた。

まるで、滅心したかのやうに、どすくろい憤怒と、苦悶に、ぶる／＼とそれを睨んでゐた理平は、いきなり彼女の手の物を引ッ奪くつて、

「買はう！ 幾値だ」

と、言下にビリ／＼と引き裂いてしまつた。

「お生憎さまです」

と、お光さんは皮肉な商人のやうに、わざと少し頭を下げて、

「それは、お賣りいたしませんわ、なぜかといへば、幾ら君の財力で買占を試みても、原板でない以上は、何萬でも複製がきゝますからね。無駄ぢやないこと」

と、又隠しの中から、一葉の寫眞を出し示しながら、

「たとへば、かういふ、トリツク寫眞でも作ることができるとすから」

次のそれは又、正視できないほど悪辣な猥畫屋のトリツクに依つて畫面の擴大されたものだつた。夫人のお旗の首は、見も知らない賣笑婦の裸體の胴にすげ代へられてあつた。理平はもうそれを奪つて、裂き捨てる勇氣さへ失つてしまつた。

その硬ばつた理平の顔と、慚愧そのものゝやうなお旗の戦慄とは、トム公の眼に、頗る愉快な對照であつた。トムは、椅子の上に軽く足を彈ませながら、その間に、ハーモニカの低吟を唇に弄しはじめた」

「もつと、ごらんにいれませうか。まだ、奈都子さんのもあります」

「ゆるしてくれ、もう、たくさんだ」

理平は、両手で、頭をかゝへたまゝ、たうとう屈伏してしまつた。

「金はいくらでもやるから、その原板を持つて来てくれんか」

「賣るならば、私は、輸出繪ハガキ屋のトリツク師へ賣りつけてやつてよ。かういふ繪は、外國船の下級船員たちが、非常によろこぶもんですつて」

「だから、わしが買ふよ」

「いゝえ、賣らないといふんですよ。——ようござんすか君！ 私は、これを賣りつけに來たんではあ

りません」

「ぢや、何だつて」

「夫人も、一言あつていゝでせう、君はこれを認めますか。騎手の神崎との醜行を」

「え！ 今いほうと思つてゐたんです」お旗は、乾いた唇をわななくとさせて——「それはみんなトリツクです。私の、何かの寫眞を盗んで、悪戯をしたんです、冤罪です」

と、終りの一句を、理平に向けて、訴へるやうに叫んだ。

「む、む、さうぢやらう。誰かの、悪戯にちがひない。おまへにとつては、まつたくの冤罪だらう。もし、そんなものを、承知しながら流布するならば、警察の力を借りて」

「君たち！」お光さんは、平等に、ふたりを睨んで、その秩序のない泣き言に句點を打たした。

「そんな強がりや、見ツともない狎れ合ひはおよしなさい。その代りに、夫人の冤罪といふ點だけは認めて上げませう。場合によつては、この原板を無償で進呈してもいゝことよ。——だが、私の大事な用向きはこゝなのだから、こゝをよく聞いて欲しいの」

と、お光さんは、平調に澄まし返つて「冤罪といふことは、これほどに怖いことでせう。だのに、夫人は、君よりもつと正大な、一人の勞働者を、冤罪に墜し放して、素知らぬ顔をしてゐましたね。

——そのことは、私が連れて來た男の口からはせませう。——黒眼鏡君、來て頂戴」

彼女が、扉の外へちよつと顔を出すと、瀟洒な巾着ツ切の常は、おとなしい笑ひをたゝへながら、

「ごめん下さいまし」  
と、羽織の裾をはねて、一つの椅子を占めた。

## 夕坂越えて

トム公は愉快でたまらなかつた。ハーモニカを唾だらけにして、弄んでみた。その間に、彼の希望してゐたことは、はきくと、片づいて行つた。

船渠の構内で、お楨の指環を竊盗した眞犯人が、龜田でなかつたことは、黒眼鏡の口から立證された。

それを掴つた當人——黒眼鏡の常が、自分の口から述べることはだつた。お光さんは又、その證據として自分の手にある、金剛の指環を見せた。

理平もお楨も、その後、龜田がほんとの竊盗者でないことは、うすく感じてゐたのであつたが、さういふ階級の人間に、何らの同情も介意もしない富豪通有の冷淡さが、彼らにもあつて、いゝかげんに放念してゐたのである。然し、今はお光さんに、きびしい鞭をビシ／＼と打たれて、その眞實のまへに、慚愧のあたまを下げずにはゐられなかつた。

「さつそく、龜田といふ人を、貰ひ下げます。實にどうも、何とも、すまない事ぢやつた」  
「當然その人には、賠償する義務がありますわね」

「あります。その人の身の立つやうに考慮しませう」

「よろしい、誓つたことよ。——ではすぐ伊勢佐木署の保科署長を呼んで貰ひませうか。黒眼鏡は自首するさうです、つまり、冤罪をうけてはひつてゐる龜田と入れ服りになるんですから」

「さつそく、電話をかけませう」と、理平は唯々として、お光さんの命に服した。

署長、司法主任、ほか二三人、すぐに自轉車をとばしてきた。黒眼鏡は、いゝとして、船渠以外の犯罪の事實までをそこで陳述した。それは、すこしも暗惨な氣分のない、明るい話をするやうだつた。

「仕立屋の身内か。おやいちど、手にかけてことがあるな」

「こやつかいに成つたことがございます」

と、いふ風に柔順であつた。

「よろしい」

と、常の方を終つてから、

「検事局の方へ上申すれば、龜田は、即日放免されませう。何、まだ未決監ですから、法曹界の人々に聞えても、問題化される心配はありません。こんな例はありがちな事です。——それからトム公の方です」

と、チラと、彼をしり目にかけて、

「縣廳の警務部へ行つて協議した結果ですが、たとひ本人が、大隈伯のおたづねになつてゐる千坂家の

身よりの者であるにせよ否にせよ、情實でこの儘、放任することはいかんといふ意見なんです。で、一應は、本署から彼の脱走した戸部の懲治監へ送り返してやることに決めました。どうぞ、それも御諒承を」

と、宣言的に、経過を告げて、すぐトム公の手くびをつかんだ。

「司法主任、ついでに、連れ歸つてくれたまへ」

「ちよつとお待ちください」

「何をしてゐるんだ君」

「彼はどこへ行きましたか」

「彼つて」

「黒眼鏡です、今の、巾着ッ切です」

「?.....」

「.....便所ぢやありませんか。中折帽がおいてある」

と、理平がつぶやくのを、トム公は、横を向いて笑つた。そして、お光さんに、眼くばせをした。

「ゐるんでせう、見て來ますわ」

と、お光さんも、部屋の外を覗き廻つた。そして、ちらつと、支那服の裾の端を見せたまま、彼女もそれつきり歸らなかつた。——もちろん、金剛石の指環も、トリツク寫眞も、その隠しにつツこんだ

まゝ。

×

×

×

大隈伯の代理といふ人と、千坂家の家令といふ老人とが、紋付袴で、千歳のお女將に伴はれて、横濱驛から大江橋のすぐまへにある千歳樓へはひつたのは、同じ日だつた。

お女將は昂奮してゐた。一昨日の晩から何か非常な奇蹟にぶつかつたやうな驚きもあつたし、最高な善事のために自分を疲らしてゐるといふ満足もあつた。

歸るとすぐに、しきりと、あつちこつちへ、電話をかけ一ゐた。高瀬家の番號も、警察署の番號もよび出された。——やがて程經て、金春の春太郎姐さんが、すこし、險に泣いた痕を見せながら、豆菊の手をひいて、連れて來た。

豆菊は、いつもの座敷着とは、すこし袂のみじかい銘仙の着物を着せられて、髪まで、お下げ髪に改められてゐた。賢い彼女の眼も、すこし、きよとんとんとしてゐた。

「このお方が、おきく様といふ、お末のお嬢様でござりまするか」

と、両手をついていふ千坂家の老家令に、彼女はやはりきよとんとんとして、抱へ主の春太郎のそばばかり寄つてゐた。

やがて、しめやかに、襖を閉てきつて、大隈伯の代理の人と、お女將とが、何か細々といひきかせる

うちに、豆菊はしゆくくと泣き出した。

その心もちが分つたので、お女将はまたせか／＼と警察へ電話をかけた。話がついたといつて、急に馬車をいひつけて、豆菊も加へて、四人づれで伊勢佐木署へ出頭した。

縣廳との打合せに、さん／＼手間がかゝつたらしいが、トム公はそこにゐること二時間ばかりで、一同へ下げ渡された。馬車はまた一人の客を容れて、そこから山手へ向つて鞭を打つた。

「分つてゐる？ 赤十字病院だよ」

「分つてゐます」

「いそいでおくれネ」

お女将は、こんなうれしい日はないといつて、涙をふいた。まつたく、うれしさうだつた。

豆菊が、お下げ髪に結つて、きちんと、銘仙の袂を膝に重ねてゐるので、トム公は、ぎごちなかつた。鞭の生えてゐるそばの人、紋付袴で謹厳そのものといつた態度でゐるそばの老人、それも、鬱陶しいものだつた。

たゞ彼は、かうして公然と、母のゐる病院へ訪れ得ることがとても愉快であつた。一刻もはやく、冷たいだらうと思ふ母の手を、自分の頬べたに當てゝやりたかつた。

馬車はかなりな歩速で躍つてゐたが、馭者の鞭の数がまだ少ない氣がした。黙つてゐるお菊ちゃんだつてやつぱり同じだらうと思つた。彼は、妹の眼にいつばいうるんでゐるものを見て、共に、眼を熱く

してゐる自分に氣づいた。

馬車は、うね／＼と、黄甘の坂路にかゝつた。坂のうへに、灯が見えた。あれもこれも母の枕べにともある灯かと思はれた。——坂を登り切ると、軌は並木の下を縫つてゐる。

やがて、からたちの垣根が見えた。——夕暮の空に白いペンキ塗の赤十字病院が仰がれた。豆菊もトム公も、その窓の灯を見たときに、睫毛にぼうつとその灯が差んでしまつて、幾すぢとなく熱いものが、むづがゆく頬を流れてくるのも知らなかつた。

### 飛降り

「はい、御通知を拜見して、非常に驚いたわけです。で早速、病室も特別室の方へお移ししておきましたから」

通された病室は、雪の夜のやりに白々としてゐた。主治醫は、寢床に椅子をよせきつて、無言を守つてゐた。助手や看護婦たちの沈黙にも、あきらかに、病人の危顔を語るものがあつた。

「實は……」と、主治醫は三名だけを蔭へよんで「東京からの電報も拜見してをりましたので、極力、盡しましたが、遺憾ながらお待ちきれなかつたのです。で……只今、注射をしましたから」

「どうも、萬、やむを得んことござります」と、老家令は沈痛な低聲でいつた。そばに、俯向いてゐたお女将が、しゆくつと、嗚咽をして、突然、袖口をかみながら背を向けたので



二人ははつとして、寢床の方へ眼をふり向けた。

悲しい、嚴肅な光景が、人々の眼を衝つた。注射によつて、わづかな時間の生を意識した盲目の病人が、いつばいに、からだに被つてゐる白い衣を、かすかにうごかしてゐる。ベッドの両方から、トム公と、豆菊とが、母の胸へ、頬へ、まるで泣いてもゐないやうに顔をすりつけて、ふるへてゐた。細い、蠟細工みみたいな指が、何ものかを、宙に探つた。トム公の髪の毛をつかんだのである。片方の手には、豆菊の背をつよく抱へよせて、異様な、泣くとも歡喜ともつかない聲を、喉から發した。

「あゝ！ わたしの罪だ。……女は」と、きれんぐだつた「貞操だよ！ 貞操だよ。……おつ母さんは」

すこし息をついた。然し、あわたしい死の督促が彼女の心臓をたゞいたらしい。

「ふたりとも、堪忍してね。……堪忍してね」

わつと、トム公があるツたけの聲を出して泣いた。

「おつ母あ……」

「お母あさん」

「おつ母あ。……おつ母あ」

「おつ、おつ……おつ母さん……」

直立してゐた主治醫と看護婦とは、眼を見あはせてその枕元へ、無言のまゝ冷たい歩み運びかけ

た。

×

×

×

×

數日の後——

横濱驛のプラットホームは、今、新橋行の列車に駈けつける人々の騒音で慌だしかつた。

一等車の窓の外には、千歳の女將と金春の春太郎とが、送りに來てゐた。あとの處置はすべてよいやうにしておくといふこと。大隈伯によろしくといふこと。——そして、くれんぐも、二人のことをなるといふこと。

「いや、お坊つちゃん、お嬢さまのことは、もう一切御心配はございませぬ。何事も、大隈の御前様が、よいやうにして下さいませうから」

と、家令、代理の者、ふたりが詳嚴に帽子を脱いで勞を謝した。

五分鈴が鳴ると、女將は、のび上つて一等車のなかをのぞいた。華族のお孫になつてこれから東京の邸へ迎へられようとする豆菊とトム公とは生れ代つたやうに、品よく見えた。

「……ぢや菊ちゃん、富鷹さん、左様なら」

汽車はゆるぎ出した。送りに來た二人のすがたは、プラットホームといつしよに、うしろへ飛んで行つた。

トム公はすぐに窓から首を出した。横濱の市街、横濱の港内が、彼のひとみに展開された。船渠の構内も瞬間、眼の下に見えた。

「——菊ちゃん、うれしいかい？ 華族の家へ貰はれてゆくんだとさ」

「わからないわ、私には」

「おつ母あ、何といつたんだつけ。——死ぬ時に」

「あやまつてみたわ」

「どうして謝まるんだらう。自分の子供へ」

「よしてよ……」

「また泣くの。泣蟲」

「自分だつて、泣いたくせに」

「汽車は、疾風を衝いてみた。」

トムは、ちらと窓外をのぞいた。

「あ、もう横濱は見えねえな」

「そんなことは、やめてよ」

「おまへ、もうお嬢様になつちまつたのか。早えなあ」

と、少し浮かない顔で、

「菊ちゃんは、華族のお嬢様が似合ふよ。だが、おいらは嫌ひだ、金持もきらひだし、華族様もきらひだ。……ああ、おつ母アが生きてくれやいゝのになあ。おつ母アとなら、一生でも、かんかん蟲をしてゐた方がいゝ」

「よしてよ、そんなことば。トムさんが、かんかん蟲をしてゐたことなんか、これからはない方がいゝのよ。千歳のお女将さんもいつてみたわ」

轟音が變つた。汽車は、ひとつの川をうしろにしてゐた。

「おら、歸らう！」

「どこへ、兄さん」

「菊ちゃん、あばよ」

トムはふいに、そばにあつた帽子をつかんで扉の外へ駆けだした。あつと、豆菊と付添の二人が、窓

を開けたとたんに、トム公の矮短なからだは、激しい空氣の震動にもんどりを打つて、線路堤から沼地

らしい蘆のなかに振り落されてゐた。

「帽子が見える！ 帽子がッ」

豆菊のかなり聲が、疾風にちぎれて、列車の黒煙といつしよに、後方へ飛んで行つた。

### 彼の航路

水族館の魚みたいに、懲治監の不良兒たちは、監禁室の底にへバリついて寝てゐた。青いガラス窓の外にさつきから彷徨してゐる人影にも、なか／＼眼がさめなかつた。

「オイ、鋏を抜けよ。鋏を抜けよ」

さういふ外の幻に、やつと、一人が眼をこすり出した。そして、ほかの者の耳を順々に引つ張り合つた。

「トム公だぞ。トム公だぞ」

「えつ、歸つて来たのか」

「ほんととか！」

「ほんとだとも！」

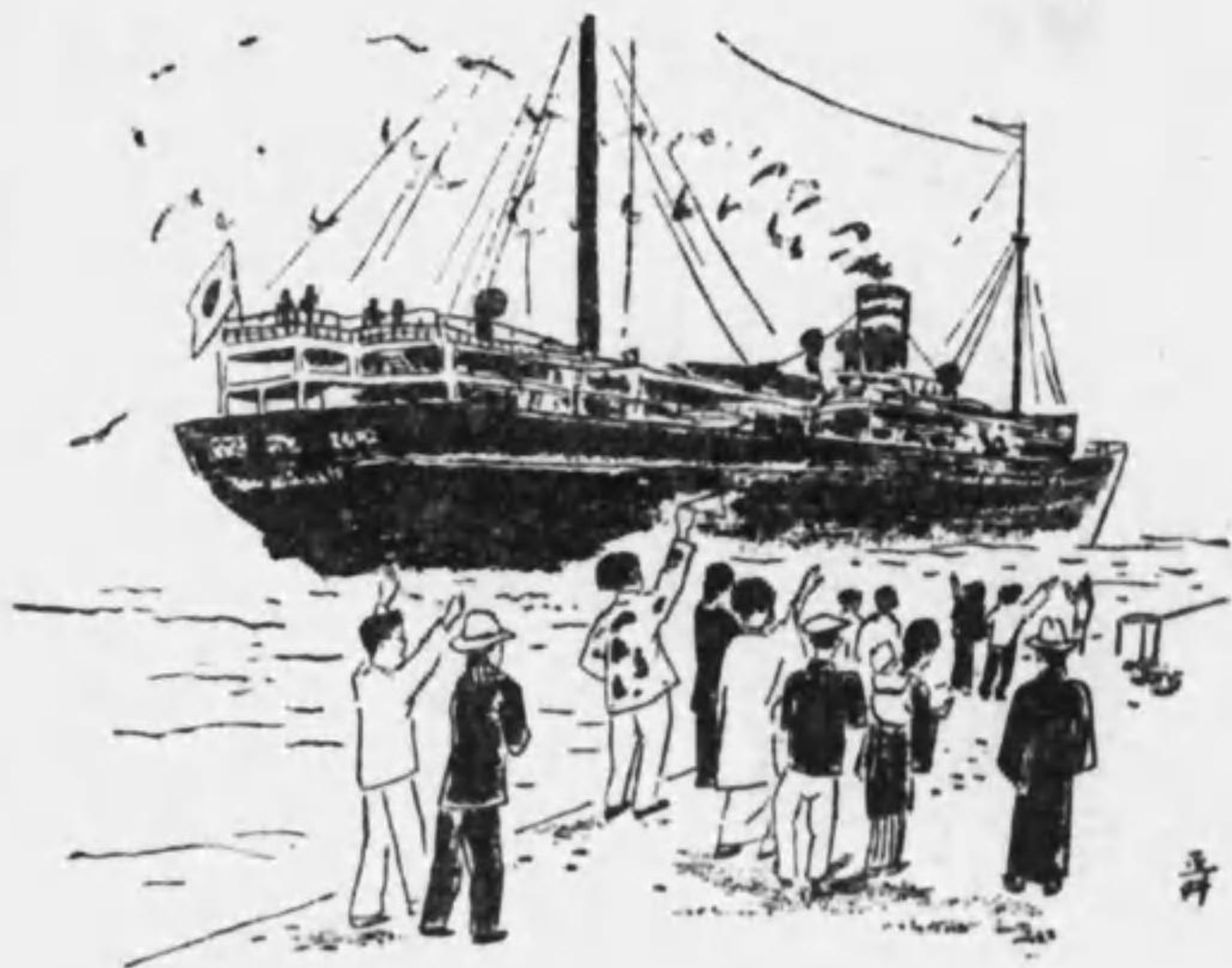
彼らは、疊の下の檢廻しを持ち出して、忽ち一枚のガラス板を外した。トム公は、にこ／＼しながら飛びこんで来た。彼は、からだぢりのポケットを探つて、手あたり次第に持つて来たものをそこへつかみ出した。アンパン、ハーモニカ、ピストル、煙草、洋刀、ドロップ。

「食へ、食へ、みんな。まだあるぞ、いくらでもあるぞ」

「偉いなあ、プリンスはやつぱり偉い。おいらのプリンス」

「約束とほり歸つて来たぜ」

「持つて来たぜ」



舟

「ばんざい！」

あんばんの饗宴が初まつた。煙草の曲喫みか初まつた。餓えた中に物のあること！ 人生のなかで、およそこんな感激的なことがあらうか。トムは、それを眺めてみると、からだぢりを幸福でくすぐられるやうに欣しかつた。果たした約束に、爽快であつた。

だが、その深夜の享樂は、大騒ぎは、當然監視人に發見されずにはゐない。トムはすぐに別室へ拉し去られた。東京の千坂家へ、大隈伯へ、また縣廳の方へ、十幾日間の交渉がかはされた結果、トム公はやはり放縱だつた母の血を多分にうけたトム公であつて、或る年齢までは、それを厳格な監視の下におく必要があらうときまつて、八丈島の最不良兒感化院へ送ることになつた。

月に二回、横濱を出帆する八丈丸に、トム公は監

視付きで乗せられた。もう海の寒い多だった。だがその朝は、港いッばいに陽がさして、水蒸気が水面にあつた。

「プリンス！ プリンス！」

トムは左舷に立つて、自分へさげぶたくさんなハンケチ女の群を見出して笑つた。お光さんはその中に立つて、白い手をさしあげてゐた。唇が屈かない——トムはさう思つた。——唇が屈かない。

また、男たちは、男ばかりで一團になつてゐた。愚連隊の連中である。警官もちらほら邊に見えるのに、二重廻しを着て、あの黒眼鏡が、やはりトムを見送りに來てゐた。——だが、彼の最も満足したのは、そこに、嬰兒をおぶつてゐる細君を連れて、龜田が來てゐることだった。

ふとい汽笛の怒氣が、霧をふらした。船は棧橋を置いて徐々に水紋の間隔をひろげた。

見送りの人影は、てんでに、口へ手をかざして、彼に錢別の「ことば」を送つた。トム公も、舷へり出して、口へ手をかざした。

「——あばようッ」

港はいつばいな陽あたりだった。方々の船で仕事をしてゐるかんかん鯉の音がうらゝかだった。トム公のために唄ふやうに、トム公のために晴れたやうに、かんかん日和を唄が流れた——

だが、少年期から次の成長へ向つて、彼に與へられたこの重大な航路が、よい環境に恵まれればよいが。——もし悪い時だつて、誰も結果に責任を持つ者はないのだから。(終)

日本小説文庫 一四二

かんかん蟲は唄ふ

(定價 金貳拾五錢)

昭和七年七月廿五日印刷  
昭和七年七月廿九日發行



印 檢



著 者	吉 川 英 治
發 行 者	東 京 市 日 本 橋 區 通 三 丁 目 八 番 地 和 田 利 彦
印 刷 者	東 京 市 日 本 橋 區 通 三 丁 目 八 番 地 木 呂 子 斗 鬼 次
印 刷 所	東 京 市 小 石 川 區 藤 訪 町 五 六 番 地 常 磐 印 刷 所

發 所 行

東 京 ・ 日 本 橋 ・ 通 三 丁 目  
振 替 ・ 東 京 一 六 一 七 番

春 陽 堂

電 話 日 本 橋 五 一 ・ 六 四 一 ・ 三 七 八 八

日本小説文庫目錄

12	淀	君後篇	三上於克吉	三五六
11	淀	君前篇	三上於克吉	三五六
10	第二の巖窟	白井喬二	二五四	
9	紅蝙蝠	長谷川伸	三〇六	
8	紅蝙蝠	長谷川伸	三〇六	
7	井原西鶴	武者小路實篤	一〇二	
6	さんど笠	子母澤寛	二〇四	
5	隠亡	堀國枝史郎	二五六	
4	闇に開く窓	里見諱	三五六	
3	關ヶ原	直木三十五	三五六	
2	孤島の鬼	江戸川亂歩	三〇六	
1	有憂	華菊池寛	三五六	定價表
13	半七捕物帳	1 岡本綺堂	一〇二	
14	半七捕物帳	2 岡本綺堂	一〇二	
15	星旗樓秘聞	木村毅	二〇四	
16	唐人お吉	十一谷義三郎	一五四	
17	唐のお吉	十一谷義三郎	三〇六	
18	砂繪呪縛前篇	土師清二	三五六	
19	砂繪呪縛後篇	土師清二	三五六	
20	青眉前篇	久米正雄	三〇六	
21	青眉後篇	久米正雄	二五六	
22	澤村田之助前篇	矢田挿雲	三〇六	
23	澤村田之助後篇	矢田挿雲	三〇六	
24	新選組物語	子母澤寛	一五四	
25	陰獣	江戸川亂歩	一〇二	
26	愛	人前篇 細田民樹	三五六	

27	愛	人後篇 細田民樹	三五六	
28	錢形平次捕物控	野村胡堂	二五六	
29	虹の歌	長田幹彦	三五六	
30	右門捕物帖 1	佐々木味津三	二五六	
31	右門捕物帖 2	佐々木味津三	二五六	
32	右門捕物帖 3	佐々木味津三	二五六	
33	沈鐘と佳人	白井喬二	一五四	
34	笑の王国	佐々木邦	三〇六	
35	銀	河前篇 加藤武雄	二五六	
36	銀	河後篇 加藤武雄	二五六	
37	仇討五十三次	佐々木味津三	二〇四	
38	愛憎の彼方前篇	中村武羅夫	三〇六	
39	愛憎の彼方後篇	中村武羅夫	三〇六	
40	戀愛黒點前篇	正木不如丘	三〇六	
41	戀愛黒點後篇	正木不如丘	二〇四	
42	草に祈る	櫻井忠温	一五四	
43	女殺延命院	土師清二	三〇六	
44	戸並長八郎前篇	長谷川伸	三〇六	
45	戸並長八郎後篇	長谷川伸	三〇六	
46	南國太平記前篇	直木三十五	近刊	
47	南國太平記中篇	直木三十五	近刊	
48	南國太平記後篇	直木三十五	近刊	
49	清水次郎長前篇	村松梢風	三〇六	
50	清水次郎長後篇	村松梢風	二五六	
51	姪川博士	大下宇陀兒	三五六	
52	盲目の目撃者	甲賀三郎	二五六	
53	菊一文	吉川英治	三五六	
54	右門捕物帖 4	佐々木味津三	二五六	

55	敵討雜記帳前篇	直木三十五	二五六
56	敵討雜記帳後篇	直木三十五	二〇四
57	蟲	江戸川亂歩	二〇四
58	蜘蛛 男	江戸川亂歩	三五六
59	太陽と隣人と前篇	十一谷義三郎	三〇六
60	太陽と隣人と後篇	十一谷義三郎	三〇六
61	浅草 紅團	川端康成	二〇四
62	人間 飢饉	村松梢風	三〇六
63	祖國は何處へ	白井喬二	二近
64	祖國は何處へ	白井喬二	二近
65	祖國は何處へ	白井喬二	二近
66	祖國は何處へ	白井喬二	二近
67	祖國は何處へ	白井喬二	二近
68	祖國は何處へ	白井喬二	二近
69	祖國は何處へ	白井喬二	二近
70	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
71	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
72	日本嬢(前篇)	群司次郎正	二五六
73	日本嬢(後篇)	群司次郎正	二五六
74	侍ニッポン	群司次郎正	二五六
75	西南戦争前篇	平山蘆江	三〇六
76	西南戦争後篇	平山蘆江	三〇六
77	旗本退屈男前篇	佐々木味津三	二〇四
78	旗本退屈男後篇	佐々木味津三	二〇四
79	唐人 船	平山蘆江	三五六
80	英五郎ふたり	子母澤寛	二〇四
81	投げ節彌之	子母澤寛	二〇四
82	逃ける旗本	子母澤寛	二〇四

83	鳥原美少年録	木村毅	近刊
84	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
85	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
86	黄金假面	江戸川亂歩	三〇六
87	一寸法師	江戸川亂歩	二五六
88	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
89	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
90	日 輪前篇	三上於菟吉	三〇六
91	日 輪後篇	三上於菟吉	三〇六
92	清河八郎前篇	三上於菟吉	三五六
93	清河八郎後篇	三上於菟吉	三五六
94	獵奇の果	江戸川亂歩	二五六
95	艶麗風土記前篇	小島政二郎	近刊
96	艶麗風土記後篇	小島政二郎	近刊
97	神風時雨組	佐々木味津三	三〇六
98	白 鬼	三上於菟吉	三五六
99	忠臣蔵八景	本山荻舟	一五四
100	一刀流物語	本山荻舟	一五四
101	諸國捕物帳	額田六福	三五六
102	愛すればこそ	谷崎潤一郎	二〇四
103	痴人の愛	谷崎潤一郎	三五六
104	珠 壺	龍膽寺雄	一五四
105	掌の上の悪魔	龍膽寺雄	一五四
106	續右門捕物帖1	佐々木味津三	二五六
107	續右門捕物帖2	佐々木味津三	二五六
108	朱面組傳奇前篇	下村悦夫	三五六
109	朱面組傳奇後篇	下村悦夫	三五六
110	相馬大作	額田六福	二五六

152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139
安城家の兄弟後篇	安城家の兄弟中篇	安城家の兄弟前篇	緑の聖母後篇	緑の聖母前篇	女秘書	接吻市場後篇	接吻市場前篇	吉良家の人々	鳴笛を吹く女	かんく蟲は唄ふ	江戸城心中後篇	江戸城心中前篇	殺人鬼秘篇
里見	里見	里見	長田	長田	九木	邦枝	邦枝	森田	吉屋	吉川	吉川	吉川	濱尾
近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	二五	二〇	二〇	二五	三〇	二五	三〇	三〇	三〇
六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六

160	159	158	157	156	155	154	153
銃	新編乃木將軍	由利旗	螢	螢	生きとし生けるもの	心驕れる女	心驕れる女
後櫻井	櫻井	江岸田	草後篇	草前篇	山本	佐藤	佐藤
忠温	忠温	國士	久米	久米	有三	春夫	春夫
近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	二〇	二〇
六	六	六	六	六	六	六	六

124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111
饗宴後篇	饗宴前篇	東洲齋寫樂	大地に立つ後篇	大地に立つ前篇	綺堂讀物集5	綺堂讀物集4	綺堂讀物集3	綺堂讀物集2	綺堂讀物集1	風雲天滿双紙	松平長七郎青春記	喰の母	春掛時次郎
加藤	加藤	邦枝	野村	野村	岡本	岡本	岡本	岡本	岡本	佐々木	下村	長谷川	長谷川
武雄	武雄	完二	愛正	愛正	綺堂	綺堂	綺堂	綺堂	綺堂	味津	悦夫	仲	仲
三〇	三〇	二五	二〇	二〇	二五	二五	二五	二五	二五	三五	近刊	二五	二〇
六	六	六	四	四	六	六	六	六	六	六	六	六	四

138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125
殺人鬼前篇	決闘介添人	恐怖の齒型	お傳地獄	青春行狀記後篇	青春行狀記前篇	いたづら小僧日記	半七捕物帳11	半七捕物帳10	半七捕物帳9	東京行進曲	煙	心理試	天草美少年録
濱尾	大下	大下	鈴木	直木	直木	佐々木	岡本	岡本	岡本	菊池	幕櫻井	江戸川	佐々木
四郎	宇陀兒	宇陀兒	泉三郎	三十五	三十五	邦	綺堂	綺堂	綺堂	寛	忠温	亂歩	味津
三〇	二〇	三五	近刊	三五	三五	三〇	一〇	一〇	一〇	三〇	三五	一五	三五
六	四	六	六	六	六	六	二	二	二	六	六	四	六

春陽堂又庫既刊書目

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
金色夜叉	藤村詩集	新生第二卷	新生第一卷	それから	相互扶助論	河内山と直侍	三人吉三	村井長庵	倫敦塔・その他	三郎	草枕	土	坊ちやん	虞美人草	瀧口入道	
尾崎紅葉	島崎藤村	島崎藤村	島崎藤村	夏目漱石	大杉ボトキ	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	長塚節	夏目漱石	夏目漱石	高山樗牛	
五八〇	五八〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
近代の小説	松蘿玉液	多情多恨	記(まんじ)	春人	三夫人	嵐子配	硝子戸の中	片戀外六篇	にこりえ	彼岸過迄	朝鮮	滿韓とこらく	長塚節歌集	邪宗門	門	照葉狂言
田山花袋	正岡子規	尾崎紅葉	谷崎潤一郎	芥川龍之介	尾崎紅葉	島崎藤村	夏目漱石	二葉亭四迷	樋口一葉	夏目漱石	高濱虚子	夏目漱石	長塚節	芥川龍之介	夏目漱石	泉鏡花
三六〇	二〇〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇	三六〇

終